

サビエル生誕五百年



半夏生、花巡礼

（毎日が巡礼・ここは聖地）

以前からどちらかといえは早起きであったが、最近は特に早くなつた。しかし、目が覚めても午前五時過ぎまではベットの中でヘッドホンでNHKラジオの「ラジオ深夜便」を聞いたたり、朝刊を読んだり「毎日のミサ」の聖書の箇所を読んだりしている。

ラジオ深夜便は午前五時前の最後のコーナーが「きょうの誕生日の花と花ことば」。七月

一日、誕生日の花は「半夏生」、花ことばは「内に秘めたる情熱」という。

半夏生は我が家の庭にもあり、妻は「この花はあなたのお母さんが持って来られ、上から三段目までの葉が半分白くなるので三白草（さんぱくそう）と言うのよ」と教えてくれたという。

一日、誕生日の花は「半夏生」、花ことばは「内に秘めたる情熱」という。夏書くと思つていた。夏至から十一日、七十二候の一つ「半夏生」のころ、葉が半分白くなるのでこう呼ばれるようになったらしい。

私には実は「平化粧」と書くと思つていた。夏至から十一日、七十二候の一つ「半夏生」のころ、葉が半分白くなるのでこう呼ばれるようになったらしい。

節気をさらに三つに分けたもので、七十二候と呼ぶ。半夏生はその一つなのである。

足のように伸びて豊作になるようにと昔から半夏生にタコを食べたと言われ、タコ特売のPRが出ている。

スーパリーに出掛けるべよう」というコーナーがあり、タコのほか、タコ焼粉、なますの酢、お好みソースなど

自分の無知をさらすことになるが、一つの花の名前を調べるといふことがわかる。

そういえば、今、庭の中央に咲き誇る西洋アジサイのアンナベル。アジサイといえは日本



名前の由来を知ると半夏生もなかなか清そで上品な花に

どが並んでいる。今までは商魂たくましいとだけ思つていたが、今回は半夏生の言葉の歴史を知ることができ、何となくほほえましく思える。私なら半夏生の花をそのコーナーに生けるのだが：などつまらぬことを考える。

固有の植物だが、シールポルトがヨーロッパに持ち帰り、改良されて里帰りしたものだと言われている。今までは、花などにほとんど関心を持たなかったが、その奥行きを深さを実感する。

今朝も五時過ぎに庭に出て半夏生の前に立ち止まり、今は亡き母の



アナベルの向こうはたいまつ草